［実践報告］

体育学科主専攻科目「社会調査法」の検討

松本秀夫*1

The consideration of social survey as major subject of department of physical education

by

Hideo Matsumoto

Ⅰ．はじめに

2004年度の体育学部改組に伴うカリキュラム変更により，体育学科のカリキュラムは新たに構成された。体育学科は，改組後3年を経過した2007年に「体育学科・新しい科目の素顔」と題して，カリキュラムの内容，教材，教授法などの妥当性・整合性を内外に問い，授業の向上に資することを目的とした報告を行っている[1)]。その後，2度のカリキュラム改訂が行われている。しかし，大学全体の方針により，現在のカリキュラムは4年を経過しているが大きな改訂は行われていない[注1)]。

著者は，「社会調査法」[注2)]を開講時から担当している。研究手法として，量的調査によって得られたデータを統計的に解析することが多いことから，科目の担当を依頼され現在に至っている。しかし，開講時は他の学科所属であったことから，体育学科の全体カリキュラムを詳細に理解していたとは言えない。現在は，卒業研究を見据えた全体のカリキュラムの中で，この科目を主専攻科目として捉え，授業内容についての検討・改善に日々取り組んでいる。

本報告は，開講から9年が経過し，継続して授業担当をしている「社会調査法」の授業に関して，授業アンケートの自由記述の回答，卒業研究時の質問や学生のコメントなどから，授業内容，実践方法の経時的な検証及び取り組んだ改善に対する考察を行う。また，今後の体育学科カリキュラム全体における位置づけや授業内容の方向性を明確にし，改組時の学科主任が目指したように，「担当科目の教材，教授法などの妥当性・整合性を内外に問い，授業の向上に資すること」を目的とした。

＊1　東海大学体育学部体育学科

Ⅱ．カリキュラムにおける科目の位置づけと概要

1．ねらいと位置づけ

図1・2に体育学科パンフレットの体育学科開講科目及び学びのスケジュールを示した。「社会調査法」は初級編に位置づけられ，ねらいとして「社会調査の進め方の学習。リサーチリテラシーの修得」とされている[注3)]。

体育学科では，入学後の1・2セメスターにおいて必修の入門編3科目を履修し，3セメスター以降に先修条件に応じた初級編科目・中級編科目の履修を推奨している。社会調査法は，初級編として人文社会科学，保健体育科教育学の研究において用いられる調査研究の手法を学ぶ科目として履修が推奨されている。推奨される履修の順次性は「スポーツ科学研究法の基礎」（以下研究法の基礎）・「スポーツ科学のための論理トレーニング」（以下論理トレーニング）・「スポーツ科学のための物理・化学・生物」の先修条件が3セメスターであることから，カリキュラムの意図としては「論理トレーニング」の後に「社会調査法」を履修することを想定している。

初級編の科目としてのねらいと位置づけについては，開講当時，ねらいについての理解は十分していた。他の科目との関連性は，「卒業研究ゼミナール」と「実験計画法」，「統計学（学部共通基礎科目）」を意識して授業を展開した。しかし，所属学科が異なったこともあり，「研究法の基礎」，「論理トレーニング」は特に意識していなかった。開講後，受講学生との話の中でこの2科目との関連性を指摘されたことから，現在はこの科目の内容を意識した授業展開を行っている。また，2013年度より「論理トレーニング」の担当となったことから，以前にも増して繋がりを重視している。

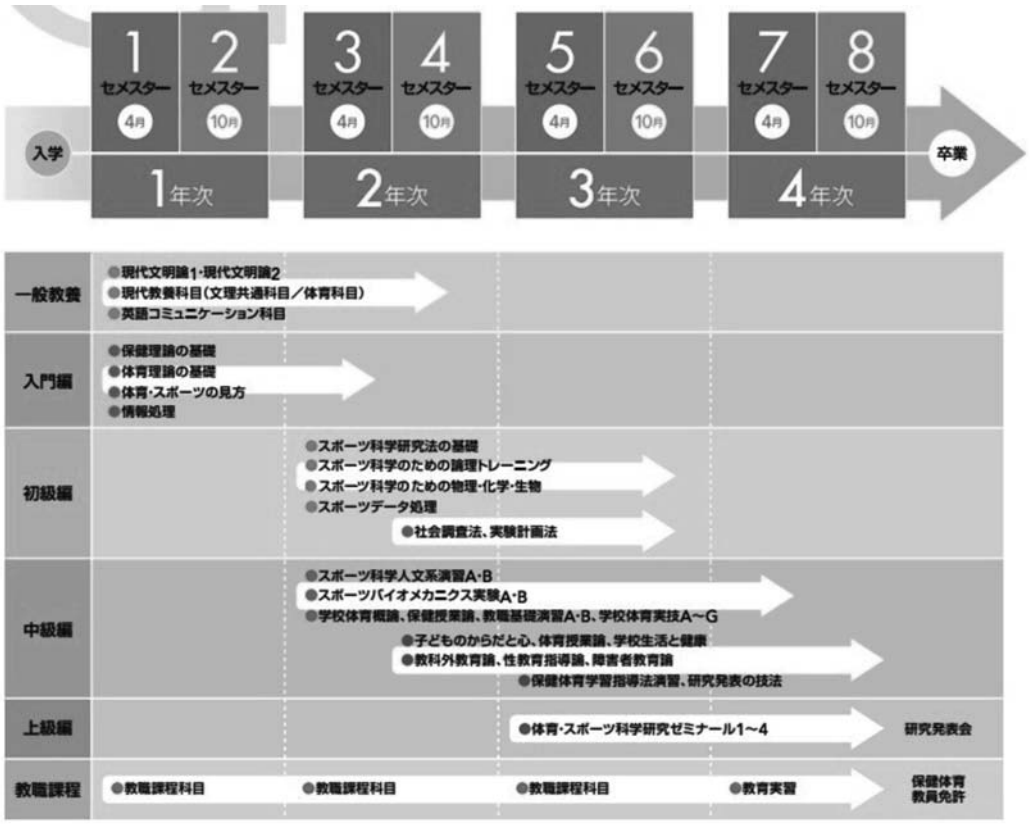


図1　体育学科　学びのスケジュール（2013年体育学科パンフレットから）



体育学科 開講科目

	授業科目名	必選	授業内容
入門編	保健理論の基礎	◉	高校の科目「保健」と、大学の授業における保健関連科目との橋渡し
	体育理論の基礎	◉	高校の「体育理論」と、大学の授業における体育・スポーツ関連科目との橋渡し
	体育・スポーツの見方	◉	体育・スポーツとは何か。体育・スポーツの見方とその諸科学への誘い
	情報処理	⊗	パソコンの扱い方に関するごく初歩の学習。パソコンへの慣れ
初級編	スポーツ科学研究法の基礎	⊗	スポーツ科学研究の入り口。研究対象・内容の概説と方法論の基礎
	スポーツ科学のための論理トレーニング	⊗	主にスポーツ科学人文系のための論理学・記号論のごく初歩
	スポーツ科学のための物理・化学・生物	⊗	主にスポーツ科学自然科学系のための物理・化学・生物の基礎
	社会調査法	⊗	社会調査の進め方の学習。リサーチリテラシーの修得
	実験計画法	⊗	実験計画の立案の仕方、データ収集に至るまでの過程に関する学習
	スポーツデータ処理	⊗	収集されたデータの処理技法の学習。統計ソフトへの慣れ
中級編	スポーツ科学人文系演習A・B	⊗	スポーツ科学人文系における研究方法論の学習とその応用
	スポーツバイオメカニクス実験A・B	⊗	スポーツにかかわる生体の生理量と物理量に関する実験 → P8参照
	研究発表の技法	⊗	研究発表とは何か。プレゼンテーションの技法に関する学習
	子どものからだと心	⊗	青少年の心とからだに関する現象・実態と課題及び解決の方法
	学校体育概論	⊗	日本の学校教育制度内で行われる「学校体育」についての概論
	保健授業論	⊗	保健の授業の構造と機能、その創出法及び分析法 → P9参照
	体育授業論	⊗	体育の授業の構造と機能、その創出法及び分析法
	学校体育実技A～G	⊗	体つくり運動、器械運動、陸上競技、水泳、球技、武道、ダンスなどの技能向上
	学校生活と健康	⊗	学校保健の各論。児童・生徒・教職員の健康と学校環境の管理
	教科外教育論	⊗	教科外教育の本質論及び教科外指導のあり方とその実際・課題
	性教育指導論	⊗	性に対する見方の学習及び性教育指導の概論とその実際
	障害者教育論	⊗	障害者に対する認識の形成、障害者指導の基本の理解とその実際
	保健体育学習指導法演習	⊗	保健及び体育の授業における具体的指導法の理解とその演習 → P9参照
	教職基礎演習A・B	⊗	望ましい保健体育教師像の理解と、教員採用試験対策
上級編	体育・スポーツ科学研究ゼミナール 1	◉	体育・スポーツ科学に関する研究の進め方の基礎・基本
	体育・スポーツ科学研究ゼミナール 2	◉	体育・スポーツ科学に関する研究方法論の習熟と確立
	体育・スポーツ科学研究ゼミナール 3	◉	体育・スポーツ科学に関する研究における課題設定と論文作成の遂行
	体育・スポーツ科学研究ゼミナール 4	◉	体育・スポーツ科学に関する研究論文の完成とその発表

◉印は必修科目 ⊗印は選択科目

図2　体育学科　開講科目（2013年体育学科パンフレットから）

2．シラバス

シラバスの概要を，以下に示した。開講時から主たる目的の変更はなく，カリキュラムマップ[注4)]に示されている育成される力（下線）の内容が加筆されているのみである。

本講では，社会・文化の諸々の現象を考え分析する方法の一つである「社会調査法」を習得することを目的とする。社会調査とは，科学的な手続きを用いて，社会現象に関するデータを収集・分析し，さらには理論化することによって，実践的な目的に役立てる手段である。この手法には，母集団から抽出された標本を対象とした質問紙による「量的調査」と個々の事例を対象としたフィールドワークによる「質的調査」がある。

体育・スポーツに関連した事柄の中で，疑問に思う内容には漠然としている部分が多く含まれている。社会調査には，これらの問題点を明確にしていく過程があり，さらには，調査実施の際に留意しなければならない手順が存在する。手順の誤りによって現象を読み誤ることも多く，得られたデータや資料をどのように集計し検討するかという統計解析もまた必須の要件となる。このような，調査の企画から，実施・結果の分析と報告というプロセスに必要な基礎知識を学ぶ。

この授業で育成される力・スキルは「挑み

力」・「知能を磨く力」・「思想を培う力」・「身体運動への科学的アプローチを学ぶ力」である。

2007 年度秋学期のシラバス詳細のスケジュールを以下に示した。

○授業スケジュール
1．社会調査とは何か
2．社会調査の流れ
　計画の立案→対象の抽出→調査用紙の作成→調査の実施→まとめ
3．調査計画の立案
　調査計画書・実施方法
4～5．調査対象の抽出
　抽出方法　標本のサイズ
6～8．調査用紙の作成法
　回答方法　質問文作成　調査用紙レイアウト
9．調査の実施方法
　調査実施の基本原則
10～11．調査結果のまとめ方
　データのまとめ方　グラフ　分析方法
12．まとめ

授業スケジュールにおける内容を見ると，量的調査が主として取り扱われ，質的調査については，初回の「社会調査とは何か」において触れられるのみであり，スケジュール上ではわからない。また，質問紙の作成とその調査結果のまとめ方までが内容であった。これは，開講時に学科主任からの「質問紙の作成とその調査方法について学生に学ばせたい」との意向からであり，量的調査を主として，意識した内容であった。

次に，最新の 2013 年度春学期のシラバス詳細のスケジュールを以下に示した[注5)]。

1．社会調査とは何か
2．社会調査の流れと調査計画の立案
　・計画の立案→対象の抽出→調査用紙の作成→調査の実施→まとめ
　・調査計画書の作成方法
3．質問用紙の作成法（質問文）・（選択肢）
4．質問紙のレイアウト　＊質問紙の作成（次週までの課題）
5．調査対象の抽出（抽出方法と標本のサイズ）
6．質的調査の方法 1
7．質的調査の方法 2
8．データ処理の方法 1（データ入力の手順）
9．データ処理の方法 2（分析手順）
10．結果のまとめ方 1（表・グラフ）
11．結果のまとめ方 2（基本統計）
12．結果のまとめ方 3（統計的検定）
13．調査結果の考察方法
14．まとめ
15．試験及び解説

変更点は，質的調査に関する内容を取り上げたことと，質問紙作成後に実際の調査を実施し集計までを行うようにしたことである。この変更が可能になった理由は，カリキュラム改訂と文部科学省の指導よる授業回数 15 回の完全実施の影響が大きい。この変更によって，量的調査のみを調査であると考える偏りをなくし，質的調査からの仮説生成，量的調査による仮説検証などバランスよく社会調査の方法論を学ぶ講義が実現したと言えよう。詳細については後述する。

Ⅲ．授業内容の検討及び他の科目との関連性

1．社会調査の理論と方法及びコンプライアンス

社会調査の理論とその方法については，当初から変更なく一般的な社会調査法の内容を展開している。しかし，最近の動向としては，国勢調査の回収率低下問題やインターネットの普及による調査方法の変化などをトピックスとして取り上げている。また，コンプライアンス（法令遵守）については，社会規範，倫理感を含め，具体的なプライバシー・個人情報，調査実施上のモラルなど，事例をあげて話をしている。

現在，体育学部では，卒業研究における質問紙調査実施に関する統一基準がなく，調査対象となるクラブやサークルの部長・監督等に調査依頼等がなく，勝手に調査を実施している場合もある。また，調査後のデータ管理に関しても，配慮がな

されていないケースも考えられる。質問紙に競技歴や出身地等の複数のパーソナルデータを記入するということは，それらの回答から，質問紙を記入した個人を特定することが十分可能であることを，学生・研究ゼミナール指導教員が再認識する必要性を感じている。早急に，卒業研究における調査ガイドラインの作成が必要であろう。例えば，学生は調査研究計画書及び質問紙（調査票）を作成後研究ゼミナールの指導教員に提出，学科を経て学部で保管する。これは，基本的に審査ではなく届け出として，研究ゼミナール指導教員がその調査の内容を正確に把握し，学科・学部は実施状況の全体像を把握しておくという意図である。個人情報の管理が叫ばれる状況では，必要な施策ではないかと感じる。

２．量的調査

開講時から 2009 年度までは，質問紙を用いた量的調査の実施方法の修得を主なねらいとして，質問紙を作成までを目的に行ってきた。しかし，2010 年度から質問紙の作成後，実際の調査を課題として実施している。変更の理由は，4 年次学生から「卒業研究時に，授業において実際の調査を行っていないので具体的な集計について，はっきりと理解できていなかった」との指摘を受けた。しかし，授業時間数の関係もあり変更には時間を要した。前述したように授業回数が 15 回となったことから実施が可能となった。

この変更により調査計画の立案，質問紙作成，調査実施，集計・図表作成方法を経て，調査報告のレポート作成，筆記試験という流れで授業を展開した。

受講学生には，実際に調査を行う目的は，調査全体の流れをつかむことにあり，プロセス（手順）が重要であることを強調した。これは，調査テーマの設定や完成度に固執し，完結できないことを危惧してのことである。授業の開始から繰り返して強調した点であり，「完全なものが最初からできる訳ではない」「失敗してわかることがたくさんある」「いろいろな調査用紙を参考にして」「すべてのプロセスをなんとか完結させること」などの注意をしている。調査計画書については，形式のサンプル（ワードファイルを含む）を提示している。

プロセスを重視する意識づけを授業開始時から行い 2〜3 名のグループで調査を行っている。調査用紙レイアウトの授業内容が終わった段階で調査用紙を作成する準備が終了し，調査対象の抽出，質的調査の講義を行っている約 3〜4 週間で調査用紙を完成，調査実施という手順で行われる。調査データの収集が終了した時点で，データのクリーニング，エディティング，コーディング作業を行い，最終的に Microsoft の EXCEL を使用してコンピュータに入力を行う。その後，IBM-SPSS・EXCEL・R [注6)] などによる統計解析の方法を学ぶ。統計解析結果のまとめ方として，図表の適切な選択方法を学び，実際の図表の作成は Excel を使っている。

実際に調査を実施したことから，多くの受講学生は全体の手順を理解し調査法を修得できたと考えられる。また，統計処理の重要性を理解して統計学の履修に繋がったとする話も聞かれた。概ね成果は上がっていると感じている。しかし，課題の負担が大きいと感じる受講学生も存在し，調査が実施できずに受講を中止する場合もある。結果的には，卒業研究での調査に繋がっていると感じているが，実際の集計処理にかける時間が少ないと感じることもあり，更なる授業改善が必要である。

調査のサンプルサイズ（N の数）は，50〜100 程度と指示している。原則，学内の身近な学生を対象とすることとし，学外での実施は慎重に行っている。もし行う場合は，調査依頼等を正規の方法に沿うように指示している。しかし，他の科目の授業中に配布回収を行うという事例も聞こえてくることから，課題の調査実施方法についても更なる検討を行う必要を感じている。

レポートについては，グループで同じデータを使用するが，個人で作成するように指示している。つまり個々が異なる形式でレポートを作成している。しかし，これについても，全く同じ，ほぼ同じ内容のレポートを提出する場合もある。レポートは卒業研究の抄録をイメージするように指示しているが，4 セメスターの学生には難易度が高く

感じられるようである。「体育・スポーツ科学研究ゼミナール」を同時履修している3・4年次生は具体的な調査イメージを持つことができるが，2年次生には具体的なイメージつかめない学生が存在している。「何を書けばいいのですか？」「考察とは何ですか？」という質問もある。これらの対策としては，卒論発表会の聴講を1年次生から推奨するなどの方策が必要かもしれない。

3．質的調査

質的調査に関する内容について，開講当初は，インタビューやドキュメント分析などの紹介にとどめ，量的調査の実施方法を主に授業を展開していた。しかし，調査は質問紙によるものであるとの認識を持つ学生も多く，卒業研究が質問紙調査偏重となることを避ける意味もあり，質的調査方法について詳細な内容を取り上げることとした。

実際の授業を受講した学生からの反応は，授業アンケートの自由記述と学生からの話では，「調査とは，アンケートのことだと思っていた」「インタビューは，ただ聞けばいいということではなかった」「質的調査の原料・材料の違いが理解できた」「様々な方法がありビックリした」「難しそうだけど，統計がよくわからないので卒論でチャレンジしてみたい」「卒論で質的調査をしたが，ただ話をまとめるだけではなく，モデルの作成などきちんとした手順が必要だとわかった」など様々な感想がある。

ここで感じることは，仮説生成としての質的調査という意味が，「社会調査法」の授業以前には，ほぼ理解がされていなかった印象を受けている。学生の多くは，「調査＝量的調査」という認識であった。2013年から「論理とトレーニング」の授業を担当することになり，この授業では，仮説生成型としての質的調査について取り上げ，インタビュー記録，観察，フィールドワーク記録などの重要性について話をしている。また，「社会調査法」の授業においては，仮説生成から仮説検証研究への発展についても話をしている。

具体的に現在の授業においては，質的調査として，観察法，インタビュー法，ドキュメント分析，KJ法，グラウンデッドセオリーアプローチ，テキストデータを量的に処理するテキストデータマイニングなどの手法を紹介している。

KJ法や，インタビュー法，観察法などの演習は，授業回数の関係で実施できていないが，実際に行う必要性を感じている。また，質的データの量的な解析方法は応用的な領域となり，授業内で実践するのは現状は困難であるが，大学院進学を目指す学生もいることから，資料等の配布に工夫の必要性を感じている。

4．統計学との関連

受講者には，統計に関する知識のない学生も多く，統計解析については理解できない場合もある。開講当初の授業アンケートには，「統計の知識を持たない学生を見捨てるな」などという辛口のコメントも寄せられていた。

「社会調査法」と「統計学」の履修は，「社会調査法」の後に「統計学」を履修する場合と，その逆の場合，同時に履修するという3つがある。従って，統計に関する授業内容は，学生によって理解度が異なり教授法に工夫が必要であった。この対応策として，統計的な内容に関しては考え方の教授にとどめ，「統計学」の履修を進めることにしている。むろん，「統計学」の履修後に「社会調査法」を学ぶ方が理解しやすい場合が多い。しかし，4セメスターが先修条件となっていることから，「統計学」の履修が後になる場合が多く。「社会調査法」を受講した後に「統計学」を学ぶ必要性を感じて，5セメスター以降で履修するケースが多く，経験的にも，このケースが卒業研究に向けての履修としては好ましいと感じている。

4．学習の到達目標及び成績評価方法

シラバス詳細には，学習の到達目標・成績評価方法について以下のように記載している。

○学習の到達目標

本講義は，社会・文化の諸々の現象を考え分析する方法の一つである「社会調査法」を習得することを目的とする。その目標に向けての具体的到達目標は以下のとおりである。

＊以下の到達目標はA評価に相当するものを示

す。

A．調査方法の基礎 「思想を培う力」

1．社会調査の基本的理論を理解している。

2．調査対象の抽出方法と標本のサイズの決定方法を理解している。

3．質問紙の作成ができる。

B．調査の実際 「智能を磨く力」「身体運動への科学的アプローチを学ぶ力」

1．質問紙による量的調査を実施することができる。

2．量的調査の集計を行うことができる。

3．調査結果を考察し，表グラフを用いてわかりやすく示し考察することができる

学習の到達目標は，この授業の目標がリサーチリテラシーの修得であることから，調査方法の理解と習得及び，その実施の成果を到達目標としている。

○成績評価の方法

1．レポート・試験によって評価する。2/3 以上の出席を成績評価の対象とする。

○成績評価基準「学習の到達目標」の各目標の総計を 100 点とし，目標達成 A 評価 80 点の場合を以下に示す。

1．社会調査の方法の理解（試験）（配点 50 点：A40 点）

2．調査用紙の作成・調査実施・分析（レポート）（配点 50 点：A40 点）

3．出席（配点 0 点）＊ 2/3 以上の出席を持って成績評価の対象とする。

成績評価の方法は，到達目標に対しての評価となることから，筆記試験とレポートを各 50％で評価を行っている。試験は，設問数を多くし総合的な方法の理解を評価している。これは，調査論としての論述解答を求めるのではなく，調査方法の理解を問う設問としている。

レポートは，前述したようにプロセス（手順）を重視し，出来映えは加点として評価を行っている。レポートを提出しての不合格はまれであるが，レポートを提出して合格点を得たが，試験によって単位が修得できなかった学生は存在する。彼らの話を聞くと，「試験を甘くみていました」「もっと勉強すれば良かった」等の答えであった。やはり，課題のレポートを複数人で実施していることから，人任せにしている受講者もいることが予想される。個人での調査課題実施も検討の必要がある。

Ⅳ．まとめ及今後の課題

2005 年度から開講している「社会調査法」は，授業の改善を行いながら 9 年間授業を実施した。本稿は，授業のねらい，位置づけ，授業内容や課題についての現状，改善点について検証を行った。

全体的に感じることは，この科目はリサーチリテラシーの科目であり，この科目を学ぶことによって社会調査の方法が修得できなければならいということである。この科目の単位を修得するということは，卒業研究において，調査を実施する，しないに関わらず社会調査の理論と方法を理解し具体的に調査の実施ができるということである。また，リサーチリテラシーを身につけるということは，物事を論理的に捉え客観的に判断・考察する術を身につけることになる。これは，研究においてのみに役立つものではなく，様々な状況下において冷静にものを判断する為の有益なスキルとして役立つものであると考えている。例えば，新聞記事や TV の報道を鵜呑みにするのではなく，母集団とサンプル，また，適切な調査方法が実施されているかに対して，疑問を持つ能力につながると考えている。

すなわち，自然科学，人文社会科学，いずれの学問領域であっても，その真理を追求する為の論理性の存在は極めて重要である。

今後の体育学科のカリキュラムの構造を考える場合，体育・スポーツ科学の研究において，論理はその根底にあり，「スポーツ科学のための論理トレーニング」は，人文社会科学の学問にだけ必要なものではない。「スポーツ科学のための論理トレーニング」「スポーツ科学研究法の基礎」は，体育・スポーツ科学を学ぶ為の基礎として，すべての学問領域に関連している。

現在，「社会調査法」は，秋学期選択 2 単位の

科目である。今回の検討を振り返ると，内容に対して，やや時間数の不足を感じている。「社会調査法」の授業において，その理論と方法論を学び，その実践の場として“実習・演習科目”の必要性を感じる。

これは，「スポーツ科学のための物理・科学・生物」「実験計画法」「スポーツバイオメカニクス実験」という自然科学系科目の構成と対比して，人文社会科学系科目における理論と方法の講義科目「社会調査法」に関連した，“実習・演習科目”を次回カリキュラム改訂において検討する必要があるように思われる。

次のカリキュラム改訂に向け，「社会調査法」の授業内容についての検討を継続して行い，より良い教育を目指していければと考えている。

本研究は，2013 年度東海大学学部等教育研究補助金の助成を受けて行われた。

注

1）東海大学のカリキュラムは全キャンパス共通である．しかし，改組は，随時行われている．湘南キャンパスでの現カリキュラムはすでに 4 年目を迎えているが，熊本キャンパスの改組が 2013 年度に行われたことから，2014 年度のカリキュラム改訂は，資格用件の変更に関係した科目や名称の変更科目など一部であった．

2）「社会調査法」は，2005 年度体育学部改組カリキュラムでは「社会調査論」として開講されていた．この社会調査論は，自然科学系において履修が推奨される「実験計画法」の対となる科目である．この位置づけは開講当初から変わらないが，一般的な研究手法を学ぶ科目であれば，「社会調査論」ではなく，「社会調査法」の名称が一般的であり「実験計画法」との整合性も含み 2010 年度の改訂時に名称変更を行っている．

3）東海大学体育学部体育学科ホームページより，参照．

4）2010 年度からカリキュラムポリシーに基づいた各科目のカリキュラムマップが作成されている．社会調査法は，全学共通「挑み力」，体育学部「智能を磨く力」「思想を培う力」，体育学科「身体運動へのアプローチを学ぶ力」をこの授業で育成させる力として指定している．

5）カリキュラムにおける開講は秋学期であるが，都合により 2013 年度は春学期に開講した．

6）IBM の SPSS は，解説本も多数あり使い安い統計解析用のソフトウエアである．7 号館のコンピュータ室にて利用が可能であることから，授業において利用している．しかし，個人での購入は難しく，卒業後の利用も難しい．卒業研究において多くの学生が利用しているが，最近はフリーのソフトウエアである R と R コマンダーの利用を推奨している．

参考・引用文献

1）加藤達郎（2006）体育学科　新しい科目の素顔，東海大学紀要体育学部，第 36 号，pp.235-236

2）松本秀夫（2006）社会調査論（体育学科・新しい科目の素顔（6）），東海大学紀要体育学部，第 36 号，pp250-251

3）東海大学体育学部体育学科　体育学科パンフレット 2013 年度，